
野口君観察日記

inisie

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野口君観察日記

【Nコード】

N3918Y

【作者名】

inissie

【あらすじ】

野口君は主人公ではありません。
異世界物です。

一人称視点の物語です。

ですので、最初のほうでは分からない事が多数出てきます。
何故？どうして、そうなるの？という点が多数ありますので、それでもよろしい方のみ、どうぞ。

”先日、章管理をしていたら間違っ
て消してしまいました。

データは残っていたか。暇つぶし程度でしたのでバックアップがありませんでした。

ですので、前回と話の流れが少し変わっているかもしれませんが、お気に入りに入れて下さった7人の方々誠に申し訳ありませんでした。

やる気を出してもう1度頑張っていきます。

前回よりも少しは見やすくなっているといいですね。”

第1話：学校編。（前書き）

あらずじにも書きましたが。

先日、章管理をしていたら間違っで消してしまいました。

データは残っていたか。暇つぶし程度でしたのでバックアップがありませんでした。

ですので、前回と話の流れが少し変わっているかもしれません。

お気に入りに入れて下さった7人の方々誠に申し訳ありませんでした。

また頑張りますので応援して下さいたら幸いです。

第1話：学校編。

手の中にある剣が血に染まっっていく。

「わりいな。手間かけたわ。」

「・・・君ならいいよ。」

「泣くな。」

「・・・君こそ泣いているじゃないか。」

「俺は泣かぬーよ。」

「そうだね。」

なんだったのだ今の夢は。

どうかしたのだろう。

現代社会に剣などもっている人など居ない。

不思議な夢だったのだろう。

「ん。いい朝だ。」

天気は快晴。雲ひとつ無い。

一つ不快なのが携帯電話がなり続けていることだけか。
携帯電話を取り電話に出る。

「どうしたんだい？野口君？」

「やっと出たか・・・時間見る。」

時間？何を言っているのかな？今日は春休みのはずで。

「言っておくが今日は始業式だ。」

そうだったね。

今日は高校生最後の1年の初日だったね。

「もう一度言うからよーく聞け南。」

「時計だね？分かってているよ野口君。」

9時15分？どうしたことだろう。私の熊さん時計が壊れてしまっているね。

「野口君。時計が壊れていたよ。今9時15分と表示されている。」
この時計も小学校から使っているからね。さすがに寿命なのだろう。
「壊れてねーよ！どこをどうみたらそうなるんだよ！良いから早く学校にこい！」

「壊れていないのかい……。」

天気は快晴、目覚ましを使わず起きた気分の良さが全て飛んでいってしまったね。

「失礼致しました。」

まったく1度や2度の遅刻で先生方も口うるさい事だ。

「おはよーさん？南。」

「やあ、野口君。」

何故疑問系？と思ったらもう10時。

これは”おはよう”なのか”こんにちわ”なのか迷う時間だね。

「南……お前去年一昨年で懲りてねーのか……？」

「なんのことだい？」

「……お前2年間で50回以上遅刻してんだぞ……。
なんで徒歩15分の学校でこんなに遅刻してるんだよ！」

「なぜだろうね。不思議だね。世界のななふし……。」

「七不思議にはなんねーよ！只の遅刻だろうが！」

さすがにUFOやネットシーと同格なのは駄目だったようだ。

「野口君の突っ込みが気持ちよくなってきたのではないだろうか……。」

「嘘をつけ！嘘を！」

「おや？野口君？もう戻ってきたのかい。」

「滝川先生への用事は終わったのかい？」

「あーあの人が今日から担任だからな。」

「・・・つかいつぱしりも大変だね・・・。」

「部活の顧問が担任というのも大変だね。」

「まあいいんじゃない？どうせ誰が担任でもかわんねーよ。生徒会長なんて使われてなんぼだろ。」

「そうだろうね。」

「お前らー仲良いのいいが席に座れー。」

滝川先生が来たようだね。

周りは皆座っているようだ。

「げ、はい。失礼しました。」

本音が漏れているよ野口君。

2時間目はHRのようだね。というか始業式が終わって皆集まったという感じか。

「俺は担任の滝川だ。これから1年間よろしく。」

じゃあーまあ、全員自己紹介してもらおう。

とりあえず野口、お前からしろ。その後進行も頼む。」

「はい。」

野口^{のちへ} 克也^{かじや}君。

私の幼馴染だ。

この北真学校の生徒会長を務める。

学力テストにおいては学年1位。

陸上部においては400mをインターハイ出場。

高校2年生の時に出た論文コンクールでは優秀賞。

囲碁部においては団体戦で県2位。

いやはや完璧だね。
とても私には真似出来ないよ。

顔は良いほうだろう。少々子供っぽい所があるのだが。
髪はツンツン伸びる真つ黒な短髪。
身長は185cmくらいだったかな。

小林 絢子さん《こばやし あやこ》さん。

学業優秀 眉目秀麗 品行方正
学校のアイドル的存在だね。

髪はショートの薄い茶色。

目が大きく。

誰からも好かれそうな顔をしている。
身長は私より高く160cmぐらい。

胸が大きい。

大きいね……。

そして、私の二人目の幼馴染だ。

「久坂……久坂!!」

「なんでしようか滝川先生。」

せっかく絢子さんのことを考えていたのに邪魔をされてしまったね。
「……はあ……お前の番だ。問題児っていうのは本当だったみたいだね……」

失礼な。私のどこが問題児だと……っとおっと自己紹介だったね。

「私の名前は、久坂^{くさか}南^{みなみ}」

部活は囲碁部の部長。部員は3名だ。

文化祭での女子ランキングは何故か3票だけ入っていて30位タイだったかな？」

「南！それは言わないって……！あ……」
髪は長く、腰までである。

1度も髪の毛は染めた時がないので真っ黒だ。

身長は150cm 体重42kg

スリーサイズは秘密だ。

絢子さん程ではないが整っていないほどでは無いだろう。
少し釣り目がちなのが……気になるがね。

それにしても野口君。

君は本当に墓穴を掘るね。

それを言ってしまったては自分がばらしたと言っているようなものだ
よ。

フフフ。

席替えも済んだ。

野口君は教壇の前か、隣が良かったのだがね。

絢子さんは前の入り口の近くと。

私は窓際が一番後ろと……

これは作威的なものを感じるよ……。

滝川先生……やっかいなのを後ろにしましたね……？

休み時間になつたね。

野口君は寝た振りか。

それはそうだろうね……この状況を見ると寝たくなるのは分かる
よ……。

「ねえねえ！久坂さん！野口君とはどんな仲なの？」

「恋人だよ。今日も朝電話で起こしてもらったのだよ。」
大きな声で言った。

クラス中の視線が集まる。

「嘘をつけ嘘を！ただの幼馴染だろうが！」

起きたね。野口君。一人だけ寝た振りなのは卑怯だよ。

「そうだね。幼馴染だね。小学校中学校は違うが。」

「あー小学、中学が違うのは家同士が道路を挟んでて学区が違うんだよ。」

何故道路を一つ挟んだだけで学校が違うのだろうか。

選べたら良かったのだけでも。

「え？そうなの？けど二人は高校で・・・一緒と・・・。」

もしかして高校は一緒の高校になりたかったとか！？キャー！

「そうなのだよ。野口君が高校は一緒になりたいと言いついてね。」

ずっと寂しかったと泣いて・・・。」

「だから真顔で嘘をつくな！」

真顔ではなく、これが素の顔なんだがね。

「ただ近くの高校を選んだら、南もまったく同じ理由だったじゃねーか！」

「そうだね。そういう事にしておいてあげようじゃないか。」

「だあー！！！」

叫び出したよ。

「・・・もう良い。」

拗ねてしまったよ。

「野口君・・・頑張つてね・・・色々。」

色々な意味が気になるね・・・。

絢子さんを見してみる。

ため息ついているね。

ふふ。ため息をついている顔も綺麗だね。

おや？雨？

先程はすごい快晴だったのに、残念だな。

せっかく今日は散歩にでも行こうと思っただがな。

色々と買いたい物があったのだけでも。

そつえば、野口君の部活も今日は無いはずだ。

食料とか服とか見たかったのだけでも、どうしようか。

また下着売り場に連れていくのも楽しいかもしれない。

ん？野口君の頭が揺れている？

野口君も昨日は寝不足だったのかな。

先生の目の前で寝るわけにはいかないだろうから頑張っているのだろつ。フッフ。

野口君は見ていて飽きない・・・ね。

椅子が倒れる音がした。

気にしてられない。

先生が何か叫んでいる。

気にしてられない。

クラスメイトの悲鳴があがった。

机が邪魔だ。

野口君に届かない。

すまない。

机の上に飛び上がる。

スカートが翻る。

野口君。

なんで、消えようとしているんだい！

また、私を一人にする気がい！？

届いて。

届いて！

もう体が見えない。

動いて。

壊れても良い。

もっと速く動いて！

指が光に消える一瞬。

私の指先が、その光に・・・野口君の指に触れた。

「良かった・・・」

私の意識はそこで途絶えた。

第1話：学校編。 (後書き)

では第1話でした。

前読んで頂いた方も、初めての方もこれからよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3918y/>

野口君観察日記

2011年11月10日08時12分発行